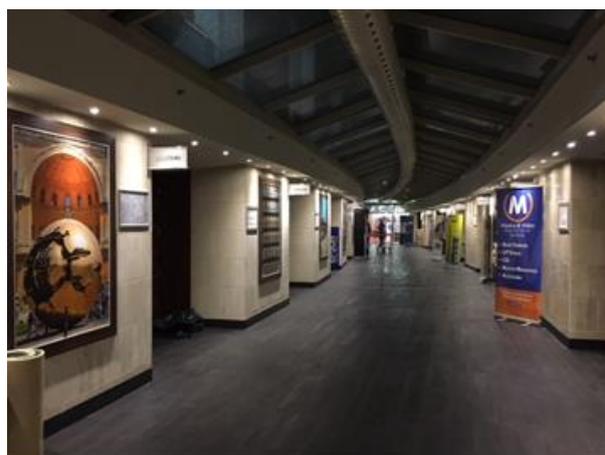


## Roma hi-fidelity 2017 見学レポート

パナソニック㈱ アプライアンス社  
井谷 哲也

ローマ市の南西郊外、四つ星ホテル Mercure Roma West で 2017 年 11 月 19 日(土)~20 日(日)の 2 日間で開催された Hi-Fi ショーに参加したので簡単に報告する。



イタリアでは、同じ主催者がこの時期のローマと 4 月と 10 月にミラノで大きな Hi-Fi ショーを開催しており、ローマは今回で 15 回目との事。因みに、次回のミラノは 2018 年 4 月 14 日(土)~15 日(日)、ローマは 2018 年 11 月 24 日(土)~25 日(日)の予定である。

ホテルの地下 1 階のボールルームと、地上 2 階のホテル客室を使って、36 ブースに 78 社が展示。開場時間は 10:00~19:00 で、入場料は無料。空港と地下鉄の最寄りのエウル・フェルミ駅からはホテルの間は、ホテルのシャトルバスが運行している。

Technics は復活 3 年目で今年初めての参加であるが、大手のメーカーが構えるブースは Technics のみ。他に大きな部屋を使うのは地元ディストリビューターのブースで複数メーカーが一つの部屋に展示されているケースが多く、ショー全体で Technics が目立っていた。また日本人の参加も Technics の 3 名のみで際立っていた。

土日共に開場早々から多くの来場者があったがお昼時にパタッと客足が止まったり、また土曜日の夜はサッカーの放送があるとかで早く引けたりするのはイタリア的かも。お客様の年齢層は広く 30 歳台から 60 歳台までで、他の欧州ショー並み。ミュンヘンの High End ほどではないが、カップル・家族連れもちらほら。

公式ホームページ：

[http://www.milano-roma-hi-fidelity-audio-show.it/Roma\\_2017\\_index.html](http://www.milano-roma-hi-fidelity-audio-show.it/Roma_2017_index.html)

場所的には、ローマ国際空港（フィウミチーノ）とローマ市外の中間の田園風景が広がる立地で、空港からタクシーで 20 分程度と交通の便は良い。ホテル周辺は何も無く、来場客は観光やショッピングスポットのついでではなく、純粋にショーを楽しみに来ている様だ。ショーそのものは小規模だが、じっくり時間をかけて見学する人が多く、何度もブースに来る人も多かったように感じた。

我々は会場となった Mercure ホテルではなく、近隣の Sheraton Parco de' Medici というホテルに宿泊。郊外型ゴルフリゾートホテルで、3 ルームのスイートだったが丁度シーズン・オフで格安で宿泊が出来た。ショー会場まで車で 5 分、ローマ市内へも車 30 分程度と便利な場所で、清潔な客室に、ホテル内のレストランやバーも充実しており、今後参加させる方にはお勧めである。

また、会場周辺は少し車で走ると地元客向けのイタリアンレストランが多数あり、観光地や市街地と異なった趣のイタリア料理が堪能できる。英語が話せないウエートレスも多くオーダーに苦労するが、それも旅の楽しみと思えば、サービスも行き届いており値段も安くお勧めである。

#### ■各社ブース



会場ホテル地下には大きめのボールルームがいくつか並び、どうやら大手のディストリビューター達がブースを構えている模様。日系を扱うディストリビューターも全てここに集まり、Epson、JVC、Onkyo、Yamaha、Sony、Accuphase、Luxman などが展示・デモされていた。



日本でも有名な Opera、Unison Reserch などのイタリアメーカーや、Dali（ここだけが一社単独ブース）の他に Focal、B&W、Hegel、Kef など欧州メーカーを扱うディストリビューターもここに陣取っている。



1階と2階は、客室（ハイエンド大阪で使うハートンホテルほどの小さな部屋）で小規模なメーカーが使っていた。イタリアには、ほとんど日本では馴染みのない小規模メーカーが多数存在する模様で、どこもオーナー自ら出向いてデモしていて、来場者との間で熱い会話がなされていた様だ（言葉が判らないのであくまで推測）。



■即売コーナー

どこのショーでもある様に、レコード店、中古店が複数参加し即売コーナーが設置されており、所謂エサ箱をつつく光景が見られた。特に目立ったのが中古レコード店。日本からの中古品は人気が高く、わざわざ別箱で Japan Press と表示。日本から仕入れたロック、Jazz 盤も多く並べられていた。日本で入手困難な山本剛の Misty が€89。80年代にプレスされた LONDON の再プレス Super Analog 盤も多数売られていたが、国内で¥3000 程度の盤が€55 と少々高めの値づけ。どこの国でも中古レコードは高騰している。



また新品レコード店では日本から輸入されている SACD が目立っていた。欧州でも見直されてきている SACD だが、ソースはほとんど日本から供給されている。



その他、オープンリールテープを扱う店もあり、レコードに続いてテープが盛り上がっているのも全世界的な傾向である。

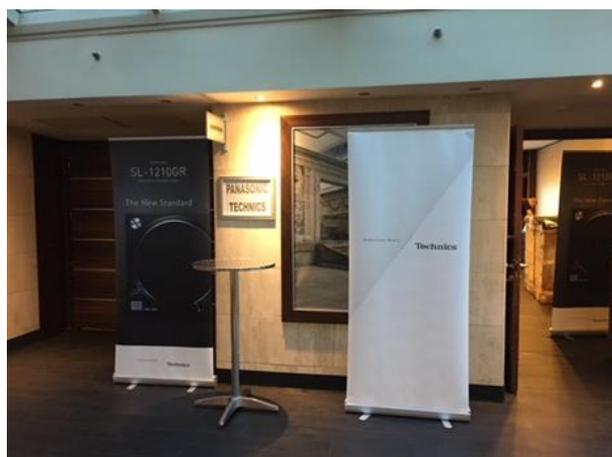


また、即売コーナーには、古い真空管やターンテーブル、アームなどの中古品(ジャンク品?)、ほとんど自作に近い様なインシュレータやシェルといったアクセサリを陳列している店もあり、こちらも終始にぎわっていた。自作オーディオを専門とする雑誌も発行されており、日本と同様に幅の広いファンが居る事を物語っている。



■最後に Technics ブース

Technics は今年初めての参加であるが、地下一階の入り口に一番近く、最大床面積の会議室を使わせて頂く事ができ、たくさんの来客を迎えることが出来た。国際フォーラムの hall-D くらいの床面積(20mx20m 程度)の部屋で、天井は普通の会議室並。床が硬くライブな部屋で現地販社が独自に手配した地場メーカーの吸音板を使って音調。現地販社も初めてのショー参加なのでラックが準備できておらず、最初貧弱な会議用の机しかなく音質的に納得できなかったのが現地メンバーにクレームした所、ホテルが協力的でわざわざレストランから頑丈なテーブルを運んでくれて納得できるレベルまで音質を仕上げる事ができた。



R1 システム、SU-G30 / SL-1200GR / SB-C700、SU-G700 / SL-1200G / SB-G90、の 3 システムと SC-C70 がデモ可能状態に設置され、ST-G30 から DLNA で再生。それぞれ現地メンバー順番にシステムを紹介しながら音デモを繰り返していた。



音デモのコンテンツとしてはピンクフロイドなどロック・ポップス系が主で、特徴的なのはかなりの爆音である事。音デモ中は会話が困難なほどだが、音質は概ね好評だった。



土曜に1回と日曜4回のセミナー開催。私が英語でTechnicsの歴史・ポリシー・商品説明を英語で行い、現地スタッフがイタリア語訳。わざわざ日本からエンジニアが来ている事もあり、毎回満員のお客様だった。また、国内のイベントなどでもある様に、現地のライター Mr. Gianluca Di Felice とコンサル契約し、本イベントで商品・技術説明の手伝いを頂いた。どこの国でもコアなお客様には、専門性の高いライターの説得力は有効である。



R1 シリーズは、ほとんどの人は初めて聴いたはずで“今ショーで最高の音だ！”と言われたお客様も複数おられたとか。Technics ブースでは最も注目されていた。他の商品ではSL-1200(G/Gr)とC70が注目されており、特にC70はチューニングがうまくいって、小さな筐体から出るリッチな低音がお客様を驚かせていた。

来場者で英語を話せる人は限られており、私を含め日本人スタッフが直接話しかけられる事は少なかったが、中には熱心にSP-10の事を質問してくる方(私が対応しただけでSP-10所有者3名)や昔からのTechnicsファンも多く、ショーへの参加自体を喜ばれ、握手や記念撮影などを要望させる事もあり、依然ブランドとして根付いている事が印象的だった。

後日、当社の現地販社メンバーからの報告によると、ショー主催者からも、Technics日本人チームのおかげで展示会が更に盛り上がったということでお礼の言葉を頂戴したとの事。



### 著者プロフィール



1980年松下電器産業（現パナソニック）株式会社入社。  
CDプレーヤ、レーザーディスクプレーヤ、DVDプレーヤ、  
BDレコーダ等の商品開発を経て現職。

現職：パナソニック(株)、アプライアンス社、  
テクニクス事業推進室、CTO/チーフエンジニア。